

「信吾君は、クラスメートに一目置かれた存在です」と、五年生の担任に言われたときは、カツは耳を疑り、「ご冗談を」と思わず笑ってしまっただ。が、それからほどなくして、

「信吾君のお陰で、うちの娘、休まず学校に行けるようになりました」と言っただけで、クラスメートのお母さんがケーキを持ってやって来て、

「うちの子、人について行き兼ねる子なもので、誰にといいわけではないんですがよくいじめられてたんです。でも、信吾君がうちの子を庇って、『やめろ！ 気分の悪い事すんな！』といじめている子に何度か言ってくれたら、この頃、クラスの誰からもいじめられなくなったようなんです。

大きな身体をフルに生かして活躍し、三年生の夏の総体では部長として皆を引っ張り、全国大会にまで出場するという快挙をなし遂げた。

信吾は心身共に健やかに成長しているかに見えた。が、それはあくまで外面だった。家の中の信吾は、ある日を境に、なぜか豹変していた。

「あの穏やかな信吾は一体何処へ行ったんだろう」カツは泣きたくなるような気持ちで思ったものだ。

その日は、信吾が中学三年になったばかりの四月の初めだった。

学校から、将来になりたい職業と希望高校を書き調査用紙を持って帰った信吾は、カツが食事

『信吾君が居てくれるからもう恐くない。信吾君に向かっただけの子なんているわけないもん』と言っただ。娘は毎日明るい顔で学校に行くようになって、私、本当に嬉しくて。信吾君と同じクラスになれて良かったと、家族で感謝してるんですよ』と言われた時には、

「信吾君の優しい大きな心の中で、理性と一緒に逞しい正義感が育っているのがクラスメイトには分かるようです」と言ってくれた担任の言葉が真実味を帯び、案外こういうのが将来大物になるのかも、などと思っただ。カツは嬉しい気持ちで信吾を見直したものだ。

信吾は中学生になるとバスケット部に入り、の準備でうろろしている台所に来てテーブルに向かうと、将来になりたい職業の欄に、こともあろうに植木職人と書き、高校へは進学しないと書いたのだ。

「何でそんな馬鹿なことを書くの？」カツは驚き声を荒げた。「一体どういうつもりなの？」カツの声は震えていた。

信吾はカツの反応に、真実驚いたようだった。何も言わずカツの顔を見上げていたのだが、やがて、ふてぶてしい表情を作ると、

「考えてることを書いただけだよ」と今まで見せたことのない険悪な目で、冷静に言った。「植木職人がどんなものか、知らぬわけでもな

「かろうに」

「知ってるさ、だからなりたいたんだ」

「知らないんだよ。お前は、本当の姿を！」

カツは言葉投げ付けた。言いたい言葉が山程あった。が、「どうしたんや？」と夫の清が顔を出したので、まさか、この子があんなのようになりたがっているから叱っているのよ、とも言えないので、「何でもない」と渋々口をつぐんだ。

信吾はカツに剣のある視線を投げつけると、自室に消えた。

まさか信吾が夫と同じ植木職人になりたがっていたとは、カツは想像もなかった。

成績も優秀で心根の良い信吾に、カツは峰子

人の上に立つ人間になれる。学校さえ出ればな」と。

カツがこう言い出すと信吾は途端に形相を変えて、荒々しくカツの前から立ち去った。

勉強を特に嫌っているとも思えないのに、何が嫌なのか、カツには信吾の胸中が一向に理解できなかった。

信吾は小さい頃から、父親つ子だった。清があらを組んで座っているのを見ると、飛んで行ってその膝の上に座った。それは、清が仕事から帰ってくつろいでいる時がほとんどだった。が、時には、仕事を手伝ってもらっている近所の四、五人の仲間と打ち合わせをしたり、慰労のため一杯

や薫以上に期待をかけていたのに……。

信吾とはそれ以来、穏やかな会話をするのが難しくなった。何に腹が立つのか終始無言で怒った顔をしているので、取り付く島がないのだ。それでも、日々接していれば、時として、十五歳の可愛い少年の顔に返ることがあった。そんな時、カツはすかさず言った。

「学校さえ出りや、何にでもなれるんだよ。何も汚くてきつい父さんと同じ仕事なんかしなくていい。白いワイシャツにネクタイ締めて、隣のおじさんみたいに学校の先生もいいし、サラリーマンもいいじゃないか。お前は成績も優秀だし優しくせに気骨のある性格をしているから、きつと

振る舞っているときだったりもした。

そんな時の話題は、植木や庭に関してがほとんどだった。が、信吾は清の膝の上で、楽しみに聞き入っていた。そんなことで仲間のおじさん達とも顔馴染みだったからか、小学六年の夏休みには、仕事に付いて行ったりもした。信吾が付いて行きたがったのだが、清もそれを喜んだ。

仕事先は、家からさして遠くない所にある旧家だった。老人夫婦だけで暮らしていたので広大な庭は何年も荒れるに任せていたのだが、東京にいる息子が退職して帰ってくるようになったので手入れをお願いしたい、ということだった。ただ茂るに任せてうっそうとしていた木々が

父親の手で生き返るように整えられる様に、
信吾は感激したようだった。

「剪定が済んだ木は、お日さんがキラキラと透けて見えて、まるで笑ってるようなんだよ」夕食の席で、その日の出来事を話す信吾の目は輝き、顔は紅潮していた。

なまじ中途半端に仕事を見せたのが悪かったのだな、とカツは唇を噛んだ。
確かに、出来上がった美しい庭を見れば感激も感動もするだろうが、庭師の仕事は決してたやすくないしカツコ良くもない。土や石や樹木やコンクリートを扱うから、力仕事だし汚れる。松の剪定などした日は、やにで手が真っ黒になる。

りつかぬ状態だった。

入学するとすぐ、信吾は親の目をかすめてバイクをして、秋風が吹く頃には中古のバイクを手にいれた。そして、学校で禁止されているというに、夜毎毎日に友達とつるんでバイクを乗りまわし、夜中を過ぎるまで帰って来なくなった。一言説教すれば凶暴な顔で反撃して、反省する気配はまるでない。

「こいつは、どうなるんだろう？」とカツは深刻に悩んだものだが、それも今から思えば一時のことだった。

結果から言えば、信吾は全くカツの願った通りになった。地元の国立大学に入り、背広を着て

夫がするのには文句はないが、息子にしてほしい仕事ではない。息子には、隣のご主人のように、背広を着て仕事に行ってほしい。白いワイシャツを着て白い手をしていてほしい。それが正直なカツの心中だった。

カツは思案した揚げ句、清に相談した。まさか庭師にしたくないからとは言わなかったが。

「庭師になるにしても、これからの人間は高校ぐらいは出とかなきゃだめだ」

清は、珍しくきつい口調でそう言った。

信吾は清にそう言われると、渋々高校に入った。が、カツへの反抗には拍車がかかり、高校時代の三年間はほとんど口をきかぬというより、家に寄

県庁に勤める身となったのだ。

高校三年の夏に起きた出来事が、信吾を変えた。信吾はバイクで走ることを止めて、勉学に励みだした。卒業アルバムの信吾は、分別のある大人の顔になっていた。

世の中の出来事は、何が良く何が悪いことなのか分かりやしない。万年寝不足のような顔が引き締まり、濃い一文字の眉に深刻な陰が漂いだした信吾を見て、カツはそう思った。そう思いつつ、カツはその事態をどう受け止めたらいいか整理できずに苦しんでいたのだが……。

(以上9月2日放送分)